

第 1 回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事録

日 時	平成 21 年 12 月 2 日 (水) 16:30 ~ 18:38
会 場	仙台市役所 2 階 第四委員会室
出席委員	江成敬次郎委員、大滝精一委員、西大立目祥子委員、 庭野賀津子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員 [6名]
欠席委員	小野田泰明委員、小松洋吉委員、[2名]
事務局	伊藤企画市民局次長、佐々木総合政策部長、折田総合計画課長、 金集総合計画課主幹、柳津総合計画課主幹
議 事	1 開会 2 委員長選出 3 委員長あいさつ 4 議事 (1) 委員会の運営に関する事項について (2) 新しい基本構想策定に向けての意見交換 (3) その他 5 閉会
配付資料	1 仙台市総合計画審議会起草委員会委員名簿 2 仙台市総合計画審議会起草委員会の運営について(案) 3 第 2 回総合計画審議会における審議会委員の意見概要 4 新基本構想の策定に関する基本的考え方(案)

1 開会

折田総合計画課長

それでは定刻となりましたので、ただいまから第 1 回起草委員会を開催させていただきます。

今回が第 1 回目となりますので、委員長がまだ決まっていないということでございますが、委員長が決定するまでの間、事務局で進行役を務めさせていただきたいと存じます。

初めに資料の確認をさせていただきます。

本日の資料を机上に配付させていただいておりますが、資料 1 から 4 までございます。抜け等ございませんでしょうか。ありがとうございます。それから、第 1 回審議会から継続的にお預かりさせていただきます資料、ドッチファイルにとじさせていただいておりますが、そちらのほうも置かせていただいております。

まず、定足数の確認をさせていただきますが、本日は 6 名の方にご出席をいただいておりますので、定足数を満たしているということをご報告させていただきます。

2 委員長選出

折田総合計画課長

続きまして、早速でございますが議事の2に移らせていただきます。委員長の選出でございます。

本委員会ですが、総合計画審議会の部会という位置づけでございますので、審議会条例の定めによりまして、委員長は委員の互選によってお決めいただくということになります。

まず委員長の選出につきまして、どなたかご推薦があれば、挙手の上ご発言をお願いいたします。

それではお願いいたします。

間庭洋委員

私も議事録を見たら、起草委員会のご指名のときに委員長が決まっていなかったということがわかりまして、そのときは何か先入観で大滝先生が起草委員長をされるんだなとばかり思っておりまして、今、伺いましたところ、そうだということであれば、是非とも大滝先生に委員長をお務めいただいて起草委員会をリードしていただければと思いますので、先生並びに委員の皆様のご承諾をいただければ、是非そのようにお願いしたいという提案を申し上げます。

折田総合計画課長

ありがとうございます。

大滝委員にお願いしてはどうかというご提案でございますが、皆様、いかがでございますでしょうか。

(異議なしの声あり)

折田総合計画課長

ありがとうございます。

それでは大滝先生に委員長をお受けいただきたいと存じます。

それでは大滝先生、どうぞ委員長席のほうにお願いいたします。

3 委員長あいさつ

折田総合計画課長

それでは、ただいま選出されました大滝委員長より一言ごあいさつを頂戴したいと存じます。

大滝精一委員長

ただいま委員長を拝命いたしました大滝です。どうぞよろしくお願いいたします。

前回の審議会でも大村会長からお話がありましたように、この起草委員会の中でたたき台をつくるという、たたき台といっても文字どおりたたかれてしまうんじゃないかと

思いますけれども、ただ、日程とかスケジュールを見るとかなりタイトになっていて、私たちも限られた時間の中でいろんな議論をこれからやっていかなければいけないかなというふうに思っています。是非その点についてはご協力をお願いしたいということがひとつと、とはいえ本体の審議会に比べると人数も少ないですし、かなり自由ないろんなご意見、議論を闘わすというようなこともできるかと思しますので、余り制約を設けないで、皆様がお考えになられていることを是非ざっくばらんにいろいろな形でおっしゃっていただければというふうに思います。

これからお話がありますように、いろんな枠組みとか、これまでの経緯とか経過とかというのはあるんですけれども、多分私たちに課されていることは、一応そういうことも踏まえた上で、でももう少しいろんな意味で前の基本構想とか計画とは違ったものを出していくというか、もちろんいいところは継承していく必要があると思いますけれども、そういうことが求められているのではないかと思いますので、余り最初から自己制約というか自己規制しないで、特に最初のほうは少し皆さんからいろいろざっくばらんなご意見をいただいたほうがいいかなというふうに思っていますので、そういう点についても是非よろしくをお願いしたいと思います。

簡単ですけれども、私のほうからのあいさつにかえさせていただきます。どうぞよろしく願いいいたします。

折田総合計画課長

委員長、どうもありがとうございました。

4 議事

(1) 委員会の運営に関する事項について

折田総合計画課長

それでは、これから本日の議事に入っていただこうと考えております。

条例の定めによりまして、委員長が議長となることとなっておりますので、大滝委員長、以後の進行をお願いいたします。

大滝精一委員長

それでは早速ですけれども、次第に沿いまして議事を進めていきたいと思います。

まず議事の第1の、委員会を運営していくために必要な事項についてお諮りをいたします。

まず、会議の公開・非公開等を決めなければいけませんけれども、事務局のほうから案が示されておりますので、まず事務局のほうから説明をお願いいたします。

折田総合計画課長

それでは、資料2に基づきまして事務局からご説明させていただきます。

資料2に、起草委員会の運営についてということでペーパーを用意させていただいておりますけれども、基本的には審議会本体と同じような定めを置かせていただこうと考

えております。裏面には傍聴の際の注意事項、こちら審議会と同じでございますが、特段のことがなければ基本的には審議会と同じような取扱いをお願いしたいと考えております。

大滝精一委員長

そういうご提案です。審議会本体のルールに合わせるということによろしいのではないかとのことですけれども、そんな形でよろしいですか。

(異議なしの声あり)

大滝精一委員長

それでは、原則としては公開で進めていくということをお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、続きまして本日の会議の議事録の署名についてですけれども、一応この名簿に従って、名簿順ということで江成委員をお願いしたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

ではよろしくお願いいたします。

(2) 新しい基本構想策定に向けての意見交換

大滝精一委員長

引き続きまして、今日は基本構想について議論を行っていきたいというふうに思います。後ほど説明があるかと思いますが、特にもう既に今あります現行の基本構想について、少しそれを見ながら課題とか、今後、私たちとして基本構想というものを新たに考えていくときに、どういう論点とか視点があるかというようなことについて、少し資料等も検討しながら進めてまいりたいというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、事務局から資料の説明をお願いいたします。

折田総合計画課長

それでは、資料3と4に基づきましてご説明をいたします。

まず資料3でございますが、こちらは前回の第2回審議会におきまして、皆様から事務局が示した論点についてご意見をちょうだいしましたが、それを論点ごとに整理させていただいたものでございます。発言内容の取りまとめに当たりまして若干要約させていただいておりますので、ニュアンスが違ふといったこともあるかもしれませんが、そこはご容赦いただきまして、その点も含めてご議論いただければと存じます。

中身に関しましては、前回の審議会と重複するところがありますので、ご説明については省かせていただきますけれども、委員それぞれのご意見、それからここにいらっしやらない審議会のメンバーのご意見というのを念頭に置きながら、今後議論を進めていただければ幸いです。

それから、資料4でございます。新基本構想の策定に関する基本的な考え方ということで、これからの議論に際してご留意いただきたい点を事務局にて数点まとめさせていただいております。

まず、現基本構想の位置づけでございますけれども、前回の基本構想がつくられたときも非常に今と似たような厳しい時代状況であるという認識については当然共通するものがございました。その中で特筆すべきところは、将来における本格的な成熟社会の到来に備えて、この10年、過去10年になりますが、その準備期間として行うべき都市づくりの指針というような性格づけがなされていると考えております。

それから、2に移りまして、基本構想策定後の状況でございますが、策定したときの時代状況からかなり、変化の方向としてはほぼ想定どおりであったかと総括できると思いますが、特に人口でありますとか高齢化といったところで急速に変化しているといったところはひとつ挙げられると思います。あと、直近の動きも含めまして申し上げれば、その人口であるとか高齢化であるとか、そういったものの変化よりもかなり早いスピードで経済というものが変質をしてきているのではないかということが言えると考えておりまして、まさに本格的な成熟社会というのが到来しているというのが今の状況ではないかと考えております。

それでは、その「成熟社会」という言葉が何度も出てまいりますが、それは一体何であるかといったところで、おさらいになりますけれども、現行の基本計画においては、人口や経済の量的な成長が飽和点に達した次の段階の社会。心の豊かさでありますとか、生活の質を重視する価値観が重視されて、個性や多様性を生かし創造性を活力として、持続可能な安定性をつくりだしていくべき社会のことというような定義を置いております。学説上いろんなお考えがあるかと思いますが、今の基本計画はこの定義というものをベースにしておりますので、今回、新たな基本構想、基本計画を議論していく上で、この定義について見直しが必要かどうかも含めてご議論いただければと考えております。

それから、この成熟社会における変化、より具体的に見ていくことが必要かと思しますので、若干の例を挙げた上でご説明を申し上げます、大きな変化としては人口構造が変化する、人口の全体のボリュームが減る人口減少でありますとか、その人口の中の状況、少子高齢化と、割合が変わっていくといったことがございますが、これが起こすと思われる問題についてまとめておりますが、生産年齢人口の減少でありますとか、それに伴う社会保障の体制への影響、それから地域活力の低下、都市構造のミスマッチ、都市インフラの維持・更新の負担の増大、財政制約の強まり等々のさまざまな問題、これは原因と結果ということではなくて、それぞれ相互に関係するものがございますが、こういった点も含めて人口構造の変化といったところをとらえていく必要があるかと思します。

それから、先ほど申し上げました経済の変化でございます。ある意味、低成長時代の到来といったことが言えるのではないかと考えております。低成長というときあくまでプラスということが前提でございますが、ややもすればマイナス成長の時代といったフレーズでももしかするといいのかもしれませんが、ある意味そういったその経済の変化の中で今後どういった変化が起こり得るのかということを考えますと、ひとつあるのは、

量的な拡大が飽和したというところの平行な現象と言えるのかもしれませんが、モノの消費から時間の消費といったことに人々の価値観というのは変化してきているのではないのか。それから内需拡大の限界、ある意味、今の国策の方向を言えば、外需主導から内需主導への転換ということはございますが、その外需に伴う経済成長といったものが曲がり角を迎えている中で、それが内需自体もしぼむような影響というのはあるんじゃないかというふうに考えております。そうしたことから、雇用の問題でありますとか、国全体としての産業構造の転換の必要性といったことから、この経済の変化というのを見ていく必要があるかと思えます。

それから、社会の変化でございます。価値観が多様化してきていると思えます。家族のあり方でありまして、人それぞれ生き方の問題も含めてかなり多様化してきていると認識しております。そうした中で、地域のつながりの希薄化といった側面もありますし、ある意味プラスという意味では環境意識、これだけ地球環境問題が取り上げられていますので地球環境意識の高まりであるとか、あとは人の価値観が多様化したので、市民活動、集団としての行動の多様化といったこともひとつの動きとしてとらえていく必要があるのではないかと考えております。

すみません、体系的にまとまっていないので大変恐縮でございますが、成熟社会という言葉をもとにとらえていくのかといったことは、ひとつの大きな論点になるうかと思えますので、こうしたところを出発点にご議論いただければと考えております。

最後に、新基本構想についてでございますけれども、ひとつ議論の方向性として、これが新基本構想のタイトルになるという意味ではございませんが、新基本構想のテーマとして、成熟社会に対応した都市の質的な向上による新たな成長といったことをお考えいただければなと事務局は考えております。

その背景となる時代認識でございますが、これも含めてご議論いただきたいと思います。その21世紀ということに我々、実際入って、時代というものが想定を超えるスピードで急速に変化をしているのではないかと。その上で、我が国の経済というのはかなり成熟段階に入りまして、人口減少社会というのも既に国全体としては来ていると。仙台市も遠くない将来に人口減少の局面に入っていくといったことがあります。それから、こうしたことからわかるように、人口や経済というものの量的な成長というのはピークに達しておりますので、今後はその物質的な充足といったことよりも、心の豊かさでありますとか生活の質といったことが求められる成熟社会へと移行していくということが想定されると考えます。

そうした意味で、我々だれしも経験したことない成熟社会において何が重要となるかと考えたときに、やはりその個性であるとか多様性であるとか創造性といったものが、その量的なボリュームにかかわって、新たな社会の活力になるのではないかと考えております。

仙台を取り巻く時代環境というのは、このように非常に厳しさを増していくわけでございますけれども、さまざまな問題、解決しなければいけない課題といったものが山積しておりますので、仙台がこれまで成し遂げてきた政令都市としての成長というのを礎にしまして、将来にわたって市民が希望と誇りを持てる持続可能な都市づくりといった

ことを進めていく必要があると考えております。

そういった時代認識ということはどうとらえるかによりますが、その上で都市像についてご議論いただければと考えておりますが、前回の第2回の審議会でもご議論がありました。総合計画というものの性質上、市民すべてがかかわるというまちづくりの指針でございますので、ある意味、総合性というものが要求されるということとも言えると思います。片や、今後の仙台のあるべき方向を指し示す戦略性も必要であるといったご意見が委員の中からもございましたが、そういったことも念頭に置きながら議論を進めていただければ幸いです。

こうした観点から総合計画全体を見ていただきまして、基本構想で処理すべき部分、基本計画で処理すべき部分、先ほどの総合性、戦略性の中でさまざまあろうかと思いますが、そういった総合計画全体の構造というものも念頭に置きながら、ご議論いただければと考えておりますし、先ほど委員長からもございましたが、まずもって現行の基本構想の中身に関しまして、前回ご議論いただいた論点でさまざまな時代認識についてのご見解が示されましたが、それぞれの各論点に照らしてみても、現行の基本構想が一体どのようなものであるのか、結論として現行の基本構想、当たっている部分があるかと思えます。すべてが当たっているという結論も論理的にはあり得るわけでございますが、そうしたことについて、まず内容の検証をしていく必要があるのではないかと、事務局としては考えております。

以上でございます。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

今、資料4に基づきまして、新基本構想の策定に関する基本的な考え方（案）というものを、大体こんなような進め方とかステップでやっていったらどうだろうかということで、最後のほうに提案がありましたように、差し当たっては、いきなり私たちが新しいものをつくっていくというわけには、なかなか難しいので、現行の基本構想というのがあるので、少しそれについて検討してみても、その見直しが必要なのかとか、現在の状況というものと照らし合わせてみて少しそのあたりの検討、現在の基本構想について検討していつてみるというか、そういうところから始めてみてはどうだろうかというような、そういうご提案があったんですけれども、今のご説明に対しまして皆様から何か質問がありましたら、お願いをしたいと思いますけれども、どうでしょうか。この中身というよりも、むしろ進め方も含めて、こんな基本的な考え方でこれからやっていこうということだろうと思うんですけれども。

これは当面、起草委員会の中ではまずこの基本構想というたたき台をつくるというか、たたき台の提案をしますよね。その後、また次のステップで基本計画についてもやるという、そういう流れなんですか。

折田総合計画課長

基本計画については部会で詰めていくということで、この起草委員会に関しましては

基本構想の起草といったところでございます。

大滝精一委員長

そうですか。そうすると、基本計画のほうは、また審議会のメンバー、あれを2つに分けるというような話でしたっけ、この間のご提案では。

折田総合計画課長

そうではあります、先ほど私が申し上げたのは、基本計画ということも念頭に置きながら、全体の構造というのは、やはりこの起草委員会というのがひとつ、一番重要な部分を書いていくことになりますので、そういったことも念頭に置きながらご議論いただきたいということでございます。

大滝精一委員長

そうですか。そうすると、当面私たちの役割というかミッションは、この基本構想についてのたたき台というものをこれから少しくつっていくという、そういうことでよろしいわけですね。

これは全部で何回、2回、3回ですか。

折田総合計画課長

今のところ3回です。

大滝精一委員長

3回ですね、そうですか。なかなか大変ですね。

どうぞ、資料4について、今、基本的な考え方（案）というのを提示いただいたんですけれども、何か皆様方の中で、これについてご質問があればお願いしたいと思いますけれども。

どうぞ。

間庭洋委員

幾つか。資料4の裏表の数箇所に出てくるんですが、成熟社会という言葉がずっとあるんですけど、一貫して。ところどころに、そのもとでの新たな成長ですとか、あるいは都市の成長とかというものとかけ合いがよく出てくるんですが、成熟社会に向かっての成長とか、成熟社会に対応した成長とかということで、あとさらに持続可能なということとか、この概念がちょっと、何と言いますか、酌み取って読めばわかる話なんですが、結構その相互関連が微妙な感じもして、大きな今回の基本構想の、到来する成熟社会ということで、そこに向かっていく、あるいは向かっているというようなものに置きながら、新たな成長という、あるいは持続可能なという関連の言葉の用い方をどういう感じでお使いになっているのか、ちょっと伺っておきたいなという感じがしております。率直な意味でおっしゃっていただければと、別に問い詰めるという意味じゃなくて、共

有したいという意味でお尋ねしたいと思います。

折田総合計画課長

我々も実は悩んでいるというのが正直なところでございまして、恐らくその悩みがこのペーパーの混乱にあらわれているということで、そういった目で見えていただければなと思いますが、テーマに掲げております成熟社会に対応した新たな成長ということ自体、ある意味、定義と矛盾しているところがございます。それは自覚をしております。

その表のページの成熟社会の中で定義、一応のものを置いておりますけれども、その人口や経済の量的な成長が飽和点に達した次の段階の社会ということで、豊かさであるとか質というのが重視されるということがございますが、ここである意味、暗黙の前提として、今の生活レベルというのが維持されるというワードが微妙に入り込んでいるのではないかと、我々としては考えております。

ある意味、成熟社会といったときに量的な右肩下がりの時代であるというような前提のもとでの認識は共有されるんですが、恐らくそこからの反応が分かれて、その量的な縮小に応じて、縮小に合わせた形で考えていこうといった、その価値観の転換が必要であるというような議論の流れと、とはいいいながら、その量的な縮小の中において次に来るであろう豊かさであるとか、生活の質ということを支えるもの自体をきちんと備えていかなければ、いかに価値観を転換したとしても、本来その成熟社会の言葉の響きにあるような心の豊かさ、生活の質といったことにつながらない可能性がありますので、そうした意味で、事務局としては、やはり現行の基本構想のひとつのストーリーもそういう仕立てになっていると認識をしておりますけれども、成熟社会を支えるための基盤といったことが、今、まさに揺らいでいる、特に経済の面で揺らいでいる可能性があり、そうしたところに手を打たなければ、ある意味で成熟社会のプラスの面であるところのこういった豊かさ、質であるといったことを支え切れないのではないかと、問題意識というよりも危機感を持っておりまして、そうした意味でテーマとして成長と、質的な向上でありますとか、そういったことを挙げさせていただいております。

そうしたその成熟社会のとらえ方自体、恐らく皆様、事務局の中でもいろいろ議論はございますが、お考えはあろうかと思っておりますので、その点については率直にご指導いただければと考えておる次第でございます。

大滝精一委員長

よろしいですか。

間庭洋委員

はい。

大滝精一委員長

最初から何かすごく本質的な話に入ったんですけども。まあ、でもいいです、そういうことの中で少し皆さんにいろいろご意見を出していただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。
どうぞ、西大立目さん。

西大立目祥子委員

起草委員会のメンバーに入るのが初めてなので、ちょっと勝手がわからないんですけども、3回の委員会をやって起草というのは事務局でまとめられるわけなんですか。そこが何かちょっと心配なんですけれど。

折田総合計画課長

基本的に、我々のほうで皆様に頂戴したご意見をまとめて、次回の起草委員会の準備をするというような流れになるのかなと思いますが、まさに起草する委員会でございますので、委員の先生方に筆をとっていただくことが基本になるのかなと思いますが、当然、事務局が基本的には皆様の間に入って調整をさせていただくことになるのかなと思います。タイトな日程でございますので、我々としても最大限、汗をかきまして皆様にご迷惑をかけないようにしたいと思いますが、ひとつよろしく願いいたします。

大滝精一委員長

最終的にその起草の案を出すのはいつでしたっけ、タイムリミットは。

折田総合計画課長

年度末に第3回の起草委員会を開きまして、その後、審議会を開く予定でございますので、年度内というのがひとつのリミットと。

大滝精一委員長

そうすると、一応3月の下旬くらいまでには、たたき台に当たるような起草案はできているような形で考えておくということですね。

折田総合計画課長

はい。

大滝精一委員長

全部、私たちが分担し合って書くということでもないかもしれないけど、ある程度は我々自身も何らかの意味で執筆にはかわるという、そのくらいの覚悟はお願いいたしますという、そういうことのような感じでよろしいですか。

折田総合計画課長

はい。よろしく申し上げます。

大滝精一委員長

ほかにもし質問がありましたらどうぞ。

では、今日はちょっとこのことについて、一応2ページのところに既に新基本構想のテーマというようなことを事務局のほうでもお考えになられていて、今、間庭さんからもご質問のあった、成熟社会に対応した都市の質的な向上による新たな成長とかという何か大きなテーマが既に出てはいるんですけども、いきなりここからというのもちょっとなかなか議論が難しいということもあると思いますので、この後、残りの時間で少し、今、ご提案もありましたけれども、説明の中にもあったと思うんですけども、基本構想をこれからどんなふうにして策定していくというか、つくっていったらいいかということについてこれから意見交換をしていくんですけども、進め方として、皆さんにもあらかじめちょっとお願いをしておいたんですけども、現行の基本構想というものをどういうふうに見るかとか、総括するか、あるいは皆さん基本構想、これを私も改めて読み返してみただけ、かなり立派なものなんです。それで、立派なものというか、読んでみてやっぱりうんうんと思うところが結構いっぱいあって、本当に私たちがこれを書き直すというか、あるいは書きかえるというのかな、それは結構難しいかなと後で読みながら感じていたところもあるんですけども、それはそれとして、既に現行の基本構想がありますので、それをお読みになられて率直な感想でも結構ですし、ここはどうだろうかというようなことについて、少し意見を交わすというところから初めてみたらどうかというのが私からの提案です。

先ほどお示しいただきました資料3の第2回の審議会での意見ですとか、それから資料4の中身とかも踏まえて、改めて第1回の審議会の中の、先ほどやりました資料6ですか、現行の基本構想というものが資料6のところにあるかと思います。これが現行の21世紀都市仙台ということでまとめられているものなんですけれども、これを一通りお読みになられていただいているかと思うんですけども、皆様の中からこの現行の基本構想についてのお考えとか印象とか、あるいはもし再検討する余地があるとすれば、どの辺あたりが考えるポイントになりそうかというような、そのあたりから、ちょっと皆さんからご意見をいただければよろしいかなというふうに思っているんです。

これはご覧になっていただいてもおわかりのとおり、全体が4部構成になっています。まず最初に策定の趣旨というのがあって、次に都市像というのが出てきます。全部で4つ出てくるんです。それでその後、その3番目の部分が一番長いんですけども、施策の基本方向というのがかなり長く、それぞれの都市像に沿ってずっと長く記述されていて、最後に基本構想の推進というので、これは推進体制とか、基本的にどういうふうにしてこの構想を進めていくのかということについての進め方というのが全部で4部構成になっていて、特に3の施策の基本方向のところは、先ほども申し上げたように、都市像に沿ってかなり詳しい記述がずっと4つの都市像ごとに詳細に記述されているという、そんなような構成になっているんです。

これを全部書きかえる必要があるかどうかというのは、私はかなり疑問に思っていますし、先ほど事務局のほうからもお話があったように、かなりよく書けているなと思う部分も読んでみるとあるんです。ですので、そのあたりのところについて皆さん方から読んだ印象でも結構です、感想でも結構です。そういうところからちょっと始めていた

できればどうかというふうに思うんですけども。

どなたかどうでしょうか。

どうぞ、江成先生、お願いします。

江成敬次郎委員

私も、今、委員長がおっしゃった感想と同じ感想でありまして、ざっと目を通してなかなか立派に書いているなという気がいたしました。

ただというとなれなんですけれども、基本構想ですから、これは当然といえば当然なんです。具体的なといいますか、そういったところは余り触れていないというところが当然あるわけです。ですから、今、読んでも通用するというふうなことになるんだらうと。

前回の委員会のときにも、私、環境のほうが私の一応守備範囲ということになっていきますので、そのところを少し考えてみたんですが、全体として、施策の基本方向のところでは環境の部分の書きぶりは余り長くないなという、そういう印象がありました。

要は、ここの基本構想の文章を直す必要があるのかどうかというふうなことについては、この施策の基本方向に沿って計画がどういうふうに進展したのか、進展できたのか、できなかったのかというふうなことを少しおさらいしながら、どの部分の記述をどういうふうに直したらいいのかというふうなことを考えたらいいいのかなという、ちょっとそんな気持ちを今のところ持っているんです。

ですから、抽象的な、いわゆる目標像としての都市像とかいうふうなことについてはそれほど大きな変更をしなくても通用するのではないかと、まさに21世紀都市というタイトルですから、21世紀に向かってまだまだ通用するだらうという、そんな実は印象を持ちました。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

今、江成先生のお話の中では、環境の書きぶりは余り長くないんじゃないか、ちょっと短いんじゃないかという話もありましたけど、それはちょっとともかくとして、もうひとつはとても大事な論点だったんじゃないかと。計画の実際の進捗とか進展、あるいはそこを受けた上で、事務局なり市当局として、現行のこの基本構想の何に課題を感じているとか、どこがやっぱり、つくったのは平成9年、97年ですから、97年の当時から比べるとやっぱり相当世の中も変わっているということはあると思うんですけども、世の中の変化以上に、やっぱり仙台市の中でこの計画、構想に沿って行われてきたことのどういうところに大きな課題を見出しているかというようなことについては、少し事務局の側からの問題意識のようなものも、もう少し提起してもらったほうが起草はやりやすいんじゃないかという、そういう話だったと思うんです。私もそういう感じはします。これをいきなり考えろといわれてもなかなか厳しいかなという感じはあるので、またちょっと後ほどでも結構ですので、この全体の構想の中のどういうところに課題とか問題をお考えになられているかというようなことについては、この10数年の評価も含

めてちょっとお話しただければというふうに思います。

ほかにちょっと幾つかご意見をいただいた上で、少しまた事務局からの対応とか反応をいただきたいと思いますけれども。

どうぞ、柳井先生、お願いします。

柳井雅也委員

これからの未来を構想していくということで、恐らく2つの大きな変化があると思うんです。これも社会一般的な話なんですけど、ひとつはストック社会に入っていくということで、一番わかりやすい例でいいますと、家が相当、少子化の流れの中で余ってくると。そうすると多くの空き家が生じてきて、それで2人のお父さんとお母さんの間に子供が1人という関係ですから、当然両親はそれぞれもとの家がありますよね、そうすると1軒は余ってくるという、単純に言いますと。そういう社会になってくるとき、このストックというものをどういうふうに次の世代に結びつけていくかという視点、こういうのがひとつ考え方としてあると思うんです。

あともうひとつは、非常に長いトレンドの話になるんですけども、恐らく今このデフレ経済なんかもそのひとつのあらわれ方だと思うんですけど、中国とかあるいは活躍しつつあるいろいろな国々の賃金水準と日本の賃金水準がだんだん収れんしていくプロセス、そちらのほうにいよいよ入りつつあるなということで、長期的にはやっぱりこれは賃金がずっと下がっていく社会になっていくだろうというのがあると思うんです。

そういった中で、この仙台市の活力ということを考えていくとき、今までのようなこういった基本構想に描かれているような切り口でいいのかなということを、やっぱり考えていく必要があるんです。現代社会における地域政策のやり方というのは、縦割りで進化させていくというやり方が今までのひとつの流れだったんですけども、むしろこの21世紀の地域構想を考えていくときは、その縦方向に対して今度横串を刺していくような施策というんですか、例えば文化だったら文化で完結するというのではなくて、その文化を入れるとそこにいろいろな産業が発生し、雇用が発生し、そして新しい人の集まりというか集いができるような、そういう何かたった1個のぽとっと落としたりした1滴が大きな輪に広がっていけるような、そういう施策、つまりべたべたとクラスターです、簡単に言いますと、くっついてくる、そういう施策のあり方というのを考えていく必要があると思うんです。

そうすると、例えばこの基本構想で描かれていた、例えば仙台市の南のほうには産業機能とか、あと国際性については東部とかと、こういう区分が果たしてそういうやり方でいいのかな。例えば僕の極端な持論でいきますと、この工業機能は北部と西部があるんですけども、これはむしろ東北大のほうに集めちゃったほうが、今の産業のトレンドからいうと正当ですよ。だから、そういった施策の空間配置の問題も含めて考えていく必要があるだろうと、こういう串刺し状、横串を刺したような相乗効果をねらった施策を基本構想の中にひとつのコンセプトとして埋め込んでいくのが、多分、今までの基本構想との差別化を図っていく上でいいんじゃないかというのが1点です。

もうちょっと話してもよろしいですか。

大滝精一委員長

どうぞ。

柳井雅也委員

あと、それからもうひとつは、この基本構想の中で欠けているか不十分だったのかよくわからないんですが、仙台の市民像というんですか、それを真正面からとらえているという感じはしなかったんです。恐らくこういったストック経済とか、非常に静かな社会というのを想定して、そこで活力をと見出すと、一人一人の能力とか力というのはすごく重要になってくると思うんですよ。

そうすると、例えば市民一人一人ということになっていくと、その人たちの持つ美意識をどういうふうに涵養していくのか、その人たちの健康というものをどういうふうに守っていくのか、あるいはその人たちのスポーツとか運動とかそういった場をどういうふうに保障していくのか、あるいは安心、安全というものをどういうふうに保障していくのか、こういったところにもうちょっと目配りあるいは気配りというものをきかせていかないと、その市民にとって生活しやすい仙台という姿が見えてこないんじゃないかということです。ここをもうちょっと主役に踊り出させていいんじゃないかと、さっきの文化と並んで。

あともう1点は、さっきちょっと言いかけたクラスターという産業施策にかかわってくることなんですが、ここについてはやはり都市構造との関係性をもうちょっと重視して、その空間的な機能配置も関連させながら、例えば都市型の産業を起こしていく、これがやっぱり戦略性として仙台にはやっていける能力というのがあると思うんです。

その場合、例えば先生のご所属の大学だけでなく、みんな同じだと思うんですが、卒業すると半分近くが東京のほうに去っていく、これは全国の統計で見ても仙台というのは東京に行く人がトップランクなんですよ、大阪と並んで。たくさんの方が仙台から東京に行っちゃうんですよ。こういう流れを、僕たちは人口減だというのをごく当たり前に受け取って議論をスタートさせていますけれども、例えばここで雇用の場をつくれれば、意外と毎年何千人か、1万人前後の学生さんが卒業していくわけですから、そういった人たちの仮にもうちょっと多くの部分が残って、それが10年という蓄積になれば、その人口減ですらも新しい、我々にとっては仙台市ならではのチャレンジというのが可能になってくるんですよ。そういう動いていく人口をもっと戦略的にとどめる、そういう施策というのは仙台独自の施策になり得る話ですよ。

ここは、実は皆さん気づいているんですけども、本格的に取り組んでいないんですよ、どこも。だから、これをもうちょっと真正面に据えて、定住化のための、雇用の話をしたらすぐネガティブになりますから、彼らがもっと仙台で暮らしたいなという文化戦略まで含めて、総合性というものをもうちょっと追及していく、そういうチャレンジを求めていくような施策を我々は基本構想として持って、そういう野心的な取組を考えたいかがでしょうか。

そういった結果として、個人個人の人とあと産業、あと人の循環というか流れ、それ

を踏まえる形で仙台の付加価値、あるいはほかの都市との差別化、あるいは新傾向にチャレンジしていく、今言った新しい都市型産業を興していくとかそういったチャレンジ、新傾向、そしてあと市民のニーズがそうなってくると、一個一個のプレーヤーというのがはっきりしてきますから、このニーズをきちっと把握していくという、大体4つぐらいの戦略というのが見えてくると思うんですよ。そのとき初めていろんなチャレンジが我々には可能になってくるのかなと思っています。後でまたお話をさせていただきます。

大滝精一委員長

どうもありがとうございました。すごくまとまっていて大変参考になるご意見です、ありがとうございます。

今、これはもう仙台の年来の課題ですけれども、大学生、特に東北大学の学生なんかは仙台にとどまらないという話があって、これはもう広く認識されているんですけど、私この間びっくりしましたけど、ウィキペディアという電子百科事典を見ていると、仙台市と引くとそうやって書いてあるんです。ブレインドレイン、頭脳流出が起きているとはっきり百科事典に書いてあって。

柳井雅也委員

だって大滝先生、例えばフィンランド構想って福祉大が構想されていますよね。あれが例えば産業化との連携がはっきりしているかと、デザインに連携しているかというのはまだ不明瞭ですよ。でもいいアイデアですね。あと、なくなっちゃったんですけど、いわゆる東口のIT化の問題でも、せっかくいいアイデアなのに立ち消えになっていますよね。僕なんかはこういった基本構想をきちっとあそこに埋め込んでおけば、あそこはかなりチャレンジできる場所になっていく可能性があると思うんですよ。

大滝精一委員長

ITアベニューですね。

柳井雅也委員

是非そういうのは継続的にやっていったらいいと思うんですね。

大滝精一委員長

どうもありがとうございました、とてもいいご提案だったと思います。ありがとうございます。

どうぞ、ほかの皆さんからも少し、何でもいいです、文字どおり感想でも印象でもいいですので、どうぞ。

西大立目さん、お願いします。

西大立目祥子委員

先ほどから成熟社会という言葉について出ているんですけども、何かやっぱり成熟

社会に新たな成長というのは、ちょっと私としては疑問を感じました。というか、成熟社会というのは概念としてわかっているけど、まだ私たちが一人一人具体的にイメージをそこに何か持てないんじゃないかなというのが、そういう気がしているんです。成熟社会で、私はどんな生活を仙台でやっているからあなたはどうか、例えば年齢が上の人はどうか、子供たちはどうかというときに、具体的にこんな暮らしが送られて充足感が得られればそれが成熟社会だというふうに、まだそこが認識できていないんじゃないかなというのがあります。

ちょっと余談になるんですけども、NHKで「世界ふれあい街歩き」という番組がありまして、私は好きでよく見るんですけども、あれでいろんな世界の都市を歩きますよね、カメラで。それでいつも不思議でうらやましいなと思うのは、どこのまちに行っても、夕焼けなんかをおじいさんたちが眺めていて、ここのリスポンは世界一さとか、みんな自分のまち是世界一さと言うんですね、夕焼け眺めながら。こういうことを自分のまち、仙台について言えるかなという、やっぱり何かまだ言えないというか、何か仙台はこれが足りない、あそこに比べるとこれが足りないというふうに、いつも何かと比較して、それで充足感がいまだに得られていないというような気がしていて、ゼロ成長時代の市民生活ということを考えると、やっぱり私は仙台が世界一と言える市民が1人でも増えることというのがちょっと具体的にあるんです。

昨日、急いでこれを読んできたんですけども、さっき大滝先生がおっしゃったようにとても立派で満遍なくて80点という感じなんですけども、何かそれが仙台の限界かなという気がしています。だから、総合性というのがとても大事に今までされてきたわけなんですけども、もうちょっとどこか突出して、何か具体的な都市像というのが出てきてもいいんじゃないかなというふうに思うんですね。

それで、最初の例えば策定の趣旨というところがありますけれども、ここなんかも認識としてはきちんと書かれているんですけども、この文章を1ページ読んだときにもすごい閉塞感を感じてしまいました、昨日、読んでみて。すべてつくりださなければならぬ、ねばならぬ、ねばならぬというふうに書かれていて、こういう大変な時代が来るから越えなければならぬ、頑張らなければならぬ、そういうんじゃない都市づくりというか、私たちのまちづくりというのは描けないかなというふうに思うんです。

やはり成熟社会においては、市民というのがそれぞれが考えを持って、それぞれが行動して、自分たちの問題を自分たちで解決するという、そういう社会でもあると思うので、私は何かこんな「かがやく人」なんてどこかの広告みたいなコピーじゃなくて、もっと具体的に市民が仙台をつくるというようなことを都市像の中にひとつきちっと押さえて。それで、市民協働と言っているけどやっぱり何か、その手法として市民活動は使えるけれども本当の協働まではいっていないと思うんです。だから、その辺をもう少し、新しい時代の中における一人一人の市民の顔が見えるような、そういう仙台というのをつくっていければと思います。

それで、そうなってくると市役所だってとても大事で、今までのような縦割りでは多分いなくなってしまうと思うので、さっき先生がおっしゃったみたいに、文化の横割りでいく

と、そこに例えば高齢者の問題が解決できるとか、いろいろな手法がそこに入ってくると思うので、むしろ何々局なんていうのをもうちょっと取っ払って、何かすみません、局の数をどんどん、課の数を増やしたりする方向で今までは来たのかもしれないけど、もっと減らして、いろんなことがそこで論じられて横割りで解決できるような、それは何か成熟社会の市役所像じゃないかなと思いました。

大滝精一委員長

どうも、とても参考になるご意見だったと思います。特に最後のほうの市民の話とか、それから、これはさっき柳井先生もおっしゃられたことだと思いますけど、もう少し横にとか、ひとつ石を投げるとそれが波及効果で広がっていくというような政策とか施策のあり方みたいなもの、それをやっぱりまちの中でもやらなくちゃいけないし、それから一方で市役所の中でもやっぱりそれを考えたり、市役所とまちの中を同期化しないとだめなんじゃないかという、そういうお話だったと思うんです。ありがとうございました。

今、ちょっと皆さんからもこれからまたさらにもっといろいろご意見をいただきたいんですけど、成熟社会と、先ほど、僕もNHKのあの番組は大好きでよく見るんですけど、ただこれは仙台に限らず日本全体がそうだと思うんですけども、やはり成熟化していくスピードが異様に速かったというのが。ヨーロッパの国々、あれはヨーロッパなんか見て本当に美しいと思うしあれだと思いますけど、やっぱり彼らはじっくり時間をかけてゆっくりとそれをやってきたということもあるし、それを支えるための財力とインフラもあったという話なんじゃないかと思うんです。しかし、仙台だけじゃなくて日本全体がそうだと思いますけども、仙台の場合だとやっぱり相当それが急激に来るというチャレンジがあって、このチャレンジに対してどうこたえていけるかということがあって、恐らく今の現行のあれも、今、西大立目さんがおっしゃられたように、やらねばならないという。

これはだから市当局も含めて、それから、前の委員会の中でこれを起草した人たちも、そういう今から手を打っていかないと随分ひどいことになっちゃうんじゃないのという、ある種の危機意識みたいなものがこの文書の中には反映されているのかなという感じもちょっと受けるんです。そのスピードがとにかく余りにも、恐らく世界どこでも、今、体験したことのないようなことが起こっているんで、そういうことに対してある程度の構えをしておかないとまずいんじゃないかという。それはさっき柳井先生もおっしゃったストックの問題とかいろんな問題がその背後にあるということがあって、だから成熟社会と一言言ったときに、例えば私たちが世界的に見たときの成熟社会というと、どうしても北欧のようなところ、フィンランドとかスウェーデンとか、ああいうところを思い浮かべるし、ああいうところは実際行ってみるとやっぱりそういう感じがするんです。でも、いきなりあそこにジャンプしていくということもなかなか我々にとっては、ひとつのありようかもしれないけれども、いきなりはやっぱりあそこに行けないなという感じもあるんです。

そうすると、その間にどういうことをやっていったらいいかなと、別に仙台が北欧に

なる必要は全然ないんだけど、それは先ほどからおっしゃっているとおりで、もっと別なものがあっていいと思うんだけど、何かそういう成熟に対してどういうステップで歩んでいったらいいかなというようなことについて、やっぱりただならない挑戦を受けているということも一方であるのかなという感じはあるんです。

柳井雅也委員

やっぱり高齢者の割合が、今、まだ数字としては10%、20%ぐらいなんですけど、もう少しすると40%ぐらいの議論になってくるんですよ。そうなったとき、今の社会が維持できるかという危機感が実はこの基本構想には入っているんですよ、恐らく、読んでみると。その40%社会とかが到来してしまうと、多分この例えば地下鉄なんかも全部作りかえていかないと、とてもじゃないけど階段を上っていくことは無理になりますよね。そういった整備の仕方というのを考えなくちゃいけないし、ただ我々も想定を、さっき言った賃金が減っていく、ストック経済に入っていく、個人の力が前面に出てくる、そして高齢化社会を迎えるという、そういった想定をある程度共有して、未来から現実を構想していくというやり方をこの基本構想では、何ていうのか、同じベクトル合わせみたいなのをやっておかないと、多分ある人は現状から言う、ある人は社会のトレンドから言う、ある人は理想から言うということになっちゃうと話がまとまっていけないんじゃないかなという感じはしますね。

大滝精一委員長

どうぞ、間庭さん、お願いします。

間庭洋委員

今のような議論をずっと、そのとおりだなと思います。資料4にも書いてあるんですが、仙台の将来の都市像、あるいは市民がそこでどう暮らしていくか、別にそのライフスタイルを規定するわけではないですが、ある程度想定しながら、暮らしやすい仙台、暮らしというのは働きも入るんですけども、居心地だけじゃなくて。そういう都市像を想定してそれを実現する、あるいは回っていくよう、そこに近づいていけるような仕組みとしての人のほぐみだとか、さっきもちょっと出ていましたけど、仙台に暮らし続けていたいとか、学校を卒業してもここで働きたいとかいうモチベーションとか、そういう人生の展望を仙台でやっていきたいなと思うような気持ちのほぐみというのが必要だと思いますし、もちろんそれは地元の人がそう思えば当然、観光あるいは交流人口的な意味での都市の魅力につながるので、交流人口という経済その他にもつながりますし、そういった都市像と、それを実現する手段としての交流人口の増加だとか、あるいはやっぱり働く機会がないとだめですね、NPOも働く場がありますけれども、その就労する機会というのをどういうふうに戦略的に、そこで具体的な方策として位置づけたり考えるかということも今回の中に入れていかないと、さっきのような都市像、あるいは仙台における暮らしについてのひとつの密接不可分な部分の領域もちゃんと視野に入れてやっていかないと、それは実現できないということになりますから、そういったも

のをやりながら、基本構想を具体化していくというふうなことなのかなと私も思います。

一番大きいのは、やっぱりそういう都市像と人の暮らしの話なんですけど、価値観とか、人のことについてはとりわけ重要で、どういう市民像、という余り勝手に押しつけるようなことはできないんですけども、今までの仙台のトレンドからいって、その成熟社会とか何かそういうふうに向かっているときに考えられるのかといったときに、市民の意向、いろんなアンケートとか何かを見ていると、価値観というのがばーんと浮かんで見えてくるような感じがするんですね、多様ではあっても。

そういったものを実現するためにはどうしたらいいのかというときに、やっぱり柳井先生もさっきおっしゃったけど、やっぱり地域の歴史や文化とか自然だとか、あるいはスポーツとか、そういったふうなものをどうやっていくかということは、当然まちづくりとも人づくりがセットになっていなきゃいけないということなど考えると、非常に横串的な視点でそれに取り組んでいかないと、とても実現できるようなものではないと。企業がやるとか市民がやるとか行政がやるという、そういう短絡的なものでない、みんなでやらなきゃならないものばかりですので、そういったものをどういう仕組みでもって戦略的に考えるのかということをやっていくと、それが仙台で暮らし続けていきたいとか、あるいは雇用など働く機会とか、いろんなものに皆つながってくるんですね。

例えば、交流人口が増えるということは、当然働く機会も増えるとかいろんな経済との循環があるわけですし、それ自体は企業が立地する今のいろんな戦略的な、地形的なものもありますけども、やっぱり仙台という母都市的なものがあるから、例えばセントラル自動車などがすぐ近くに来ると。仙台市内には来ないけども、仙台という母都市があるからその近くに来るという展開がわかりますので、そういったものは大いに意識を持って、仙台という都市像を目指して将来とも形成していくということを営んでいくことが、経済との循環にもつながることでもあります。

さっき西大立目さんもおっしゃったんですけども、はぐくみの中で一番欠かせないなと思っているのは、やはり私たちぐらいの社会人や主婦とか大人の方は、比較的自分たちのいろんな範囲で知ることができるんですけど、子供や若い人たちが仙台の歴史、文化などを、自然とかそういったものについて、知識として非常に少な過ぎるので、さっきリスボンの夕焼けがいいというのは、これは知識も何も要らない話であるんですけども、そういうことを知ることによって、さらにそれがよく思えるということがあるんですよね。

例えば、天守台に立ったときに政宗さんだとかいろんな歴史を思うと、いろんなこと、見えないものが感じられるというものがあるわけです。例えば東北大の植物園だとか、ああいったところに行ったときも同じことは言えるんですけども。そういったものが、やはりはぐくみとしても欠かせないものであって、将来の仙台市民をそういった形ではぐくんでいく、もちろん囲い型じゃなくて、柳井先生の話に反論する意味じゃないですけど、仙台からそういう人を世界に輩出するぐらいの気持ちは持ちつつ、できるだけ、でも就労機会を持てば、地元でも働き暮らし続けていきたいという人も用意しなきゃならないんだけど、そういうぐらいの気持ちで仙台からも人材、そういう市民を輩出していく、あるいははぐくんでいきながら、仙台の都市像を、その担い手をさらにはぐく

んでいくような循環をつくっていかないと、成熟社会と概念的に言われているものには向かえないんじゃないかなというふうに思います。今までのように流入人口に頼っているだけでの市民像では、なかなかそういうのは難しいんじゃないかなと思いますので、そういった仕組みだとかをしっかりと、都市像を実現するための仕組みとして、基本方向や施策の中に組み込んでいく必要があるかなと思います。

ただ、これ見ますと本当によくできているので、さっき西大立目さんのを茶化すわけじゃないですが、なければならぬというのは2ページにどんどん出てきて、次、開くとやすらぐまちになるんですね、だからこれは非常に、なければならぬ、ならないと言っておいて、こっち行くと安らぐだから読む人ほっとするんじゃないかなという、やすらぎが必要なんだな、やっぱりと思うくらい、そういう感じなんですけど、書いてあること自体は非常に今でも通用するような内容でありますので、見直しは必要ですけども、柳井先生もさっきちょっと新しい仙台モデルみたいなを出していったらということをするんですが、やっぱりそういう暮らしだとか将来の都市像というものの感覚を大きな要素として打ちだすことによって、その方向性だとか施策というものが、そのもとで、それを実現する手だてとしてのもとの、是非具体化できればいいなと。そして、そこに当然、推進のところにも書いてありますけど、じゃあだれがそれを担うのといったときには、当然、行政も含めた市民、企業、その他NPO等々の皆さんで役割をしっかりと連携しながらやっていこうというふうにまとめられたらいいかなと、ちょっと長くなりましたが、そういう希望を持っております。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

柳井雅也委員

先生、よろしいですか。

大滝精一委員長

はい。

柳井雅也委員

今、お話伺っていて僕思ったんですけども、仙台の特徴というのは、さっき人が出ていくという、頭脳流出というのがひとつありましたよね。あともうひとつは、仙台ってお祭り多いですね、イベントとか。あれは市民の力ですね。だからこれをもっと柱に据えていって、例えばNPOの活動も含めてなんですけど、さっき、もしも仙台の市民像という、仙台のアイデンティティーということを強調する、そういうものにシフトしていくんだったら、そういったNPOであるとかイベントであるとかにかかわっていくような人たちをちゃんと応援できるような体制をやっぱりつくっていくということがひとつですね。

あともうひとつは、僕は基本構想はそこら辺よくできていると思うんだけど、閉じ

た世界でよくできているんですよね。やっぱりオープンシステムに持っていかなくちゃいけないので、先ほど間庭先生もおっしゃられたように、セントラル自動車 came 理由は仙台なんですよ。だから仙台が仙台であるということをもっときちっと自覚して、やっぱり東北と連携する仙台的あり方とか、あるいはそういった東北のいろんなものを宣伝したり、あるいはアンテナの役割を果たすような、仙台としての懐の深さもやっぱり同時に見せていくという、そういった作業も我々の任務というか仕事なんじゃないかなという感じがいたしました。

大滝精一委員長

そうですね。特に私、今、柳井先生おっしゃった最初のところは、先ほどから市民の行動力とか力とかという話があるんだけど、これはゼロからつくっていくという話じゃなくて、実は長い仙台的伝統の中で、それから私も本当のところ、多分私が学生だったころに始まった運動なんですけど、例の脱スパイクの運動とかね、そういうすごく長い伝統の中で市民が何かを動かしていくとか、市民が政策をつくっていくとかというようなこと、あるいは先ほどから言いましたように、何かお祭りとかイベントを新しくつくっていくとか、古いものを再発見して再興していくとかという、そういうあれが随分たくさんあるんですよね。それはすごく大きな伝統とか資産でもあるし、さらにそれをもっといろんな分野に広げていくというようなことで、何かひとつのアイデンティティーをつくるということはできるかなというふうな印象を持っているんですけどね。

柳井雅也委員

文化というのが、この基本構想を読んでいくと芸術なんですよ、イコール、扱いがね。だけど僕はそういう狭い定義じゃなくて、実は市民生活まで含めたものをやっぱり文化というのは再定義して、もっと広く考えていく、そこにいろんなチャンスが生まれてくるんだと思いますね。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

西大立目祥子委員

閉じた世界で完結された総合計画ではなくて、例えばこれを見たときに、果たしてどのぐらいの市民の人がこれを読んでいるのかなというふうに思ったんですね。

大滝精一委員長

そうですね。

西大立目祥子委員

このまちに暮らしていて、自分のまちがどうなっていくんだろうというのを何か知りたいときに、もうちょっと、ですから市民にわかりやすい言葉で、一緒につくっていく

仙台というのが、そういう都市像が必要だと思うし、それからやはりこれからのことを考えると、東北の中での仙台の役割というのはますます大きくなっていくと思うんですね。これを読むと、何かアジアと東北というのをつなぐような感じでしか書いていないんですけども、私は東北の町とか村とかやっぱり歩いたりすると、必ず仙台っていえば自分の娘がお嫁に行ったとか、息子が行っているとか、孫が大学行っているとか、何か親戚のまちみたいにして、どこの町、村に行ってもそういうふうにおっしゃる方が本当に多いので、そういう意味では、この背後の北東北、南東北の何かそういう、それこそ1次産業中心なのかもしれないけれども、2次産業含めてそういうのをつないだり、編集し直したり、新しい価値をつくる役割というのは、仙台は担っていくべきだと思います。だから、もうちょっと東北という言葉が表に出てきてもいいように思います。

大滝精一委員長

ありがとうございます。

庭野先生、もしあれでしたらお願いします。

庭野賀津子委員

私も、今、おっしゃられたのと同じことを感じていたんですけども、やはり3の施策の基本方向を見ますと、地球環境時代とか地球的交流とか世界の学都というふうに、非常にグローバルな視点で書かれていて、それはそれで大事な視点だと思うんですけども、例えば私などもよく学会等で海外を訪れたときに、アイム・フロム・センダイと言ったときに、ああ、仙台知っているよという方は、まずほほいないんですよ。仙台ってどこですかと必ず聞かれますよね。ですからいきなり世界にということよりも、まずは東北の中核都市として果たす役割がまずあると思いますので、そのところをもっと打ちだしていてもいいのかなというふうに思っております。

それとあと、やはりこの基本構想というのは、いわば理念を示す部分なのかなというふうに思っておりますけれども、この構想の中には理念という言葉は出てこないんですけども、理念はこうだということをまず打ちだして、それをもとに今後、実施計画というものが生まれていくと思いますので、改めて理念は何なのかというところをきちんとまとめるといいのかなというふうに思っています。

あと、さまざまな変化がありまして、それへの対応をより明確にしていくことが、今後改定する上で大事だということなわけですが、この変化というものは、例えば今回であれば人口のこと、そしてあと経済の低迷の部分が挙げられているわけですが、あとほかに基本構想を立てていく上で不確定な要素がまだあるのかどうか、そのところをちょっと精査した上で考えていかなければいけないかなというふうに思っております。

以上です。

大滝精一委員長

それについては、ちょっとまた事務局のほうからも、もし具体的な計画を立てていく

上での不確定な要素というものがあるということであれば、後でコメントしてください。
どうぞ、間庭さん、お願いします。

間庭洋委員

経済変動の話は、100年に1度とかいろいろ言われていますけど、大きな流れとしては3年とか4年とか5年の経済変動のことは余りとらわれなくて、質が変わっているということについては重要な要素なんですけど、その波のような形について余りとらわれなくていいんじゃないかなというふうに、10年の展望、要するに何をしたいのか、どういう都市を目指したいのか、どう暮らしたいのかとか、どう働きたいのかとかというふうなほうを優先していったほうが、市民の共感を得られるんじゃないかなというふうには思います。経済変動は常にあるものと思ってですね。

大滝精一委員長

そうですね。

どうぞほかの、江成先生、もし何かコメントがありましたら。

江成敬次郎委員

そうですね、ひとつ皆さんのお話を聞いていて感じたのは、仙台の資源といいですか、景観や人的な資源も含めてなんですけども、それが何なのかということについて、もう少しやっぱり共通認識までいかなくても、理解し合うというふうなことが必要なのかなという気がしました。その資源をどういうふうに生かすのかというふうなことですよね。

例えば、先ほど学生の話が出ましたけれども、学生が多いということは、ひとつはやっぱりそういう資源が多いというふうなことですよね。それをじゃあどういうふうに生かすのかというふうなことで、生かし方のひとつの方向として、柳井先生おっしゃったように引きとめるというやり方もあると思いますし、私はどちらかというと、前、土木工学にいたもんですから、うちの大学の土木工学科に来てどこに行くかというと、大体生まれ故郷の市町村に入って、そこで建設業を継いだりとか、そこで働いたりというふうなことになる。そうすると、そういう意味では、東北地方のいわゆる基盤整備を担っている人材が割と多いということがありますよね。ですから仙台でそういう人材を育てて東北地方に送り込むという、それもひとつの人材の生かし方というふうな気がしますし、それをもう少し広げて言うと、仙台に生まれ育って、大学もここに出て、だけど私は常々よく学生に言うんだけど、一度は外に出なさいというふうなことを言っていますので、そういう意味で、いわゆる製造業的な働きの方が少ないというのも、ひとつの仙台の特徴だろうとは思いますが、だから一旦は出ていってもいいよ、でもやっぱり仙台住みやすいね、いいねというふうなことで、例えば途中で帰ってくる、あるいは途中で帰ってきて自分で身につけた技術を生かして、そこで何か地場産業を興すとか、そういうふうなことがやりやすいとか、あるいはリタイアしてから戻ってきてという、それでまた力を発揮するというふうな、そういういろんな生かし方はあるんだろうと思うんですね。

その中で何ができるか、何をやるべきかというのは、やっぱり仙台の自然資源を生かす、あるいは景観を生かすとか、あるいは周辺に比較的近くに1次産業もそれなりにあるわけですから、そういうものとリンクした人材の生かし方をするとか、そういった仙台が持っている資源をどういうふうに認識して、それをどういうふうに生かすのかというふうな、そういう視点からこの将来計画といいますか、そういったものを考えていくという視点もあるかなというふうに、ちょっと感じたんですけどね。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

間庭洋委員

それらに関してですけども、江成先生おっしゃった部分なんですけど、仙台が持っている強みのひとつに、東北を思った場合、やっぱり通信も含めてですが交通のネットワーク、ポテンシャルティー、拠点性が非常に優れて高いんですね、空も海も道路も鉄道も。ですから仙台が東北に対する役割が非常に大きいということはあると思うんです。

ですから、例えば大学などの知的な資源を、これは先生がさっきおっしゃった言葉を引用すれば、学生が学校を卒業して東北で働き暮らすという部分も、知的な資源のひとつの現れですし、またエレクトロンさんが、昨今、新聞に載っているような形でここに研究所をつくったり何だりするというのも、やっぱり当然そういうものが生かされているわけです。そういうものですか、あるいは新幹線が青森まで今度、来年貫通したり北上しますと、そういったものの拠点が、仙台がますます高くなるんです。これは八戸の開業のとき現れたんですが、八戸は初めて開通したから当然、率としてはばんと上がるんですが、じゃあどこが人数として一番東京からの新幹線で量が増えたかといったら仙台なんですよ、八戸まで行ったとき。青森まで行ったら、量が増えるのは仙台だというふうにもう予測されているわけです。それをどう生かすかということは、それは東北に対する生かし方も含めた意味で、非常にすぐれた交通や通信の立地と、それからそういう知的な資源その他の、あるいはまちなどのにぎわい、そういったものをしっかりと東北のためにというわけじゃないですが、循環として東北にお役に立つような形にすると、それが仙台に何らかの形で必ず戻ってくるという経済の仕組みがもうあるんですね、今既に。ですから、さっきのセントラル自動車がそういうふうなこともあるわけです。

やっぱりそういったふうな仙台の優れていいところが、暮らしやすさも含めていろんな交流人口や企業の立地やその他につながっていますので、それを仙台がどうやって支えていくことでお互いの循環関係がうまくいくかということは、非常に大きな、コンセプトにはならないんですが、それに近いぐらいの、具体的な施策として重要なものであると我々は認識しているんですね。

ですから、例えば新幹線が青森まで今度行くことによって我々が今考えているのは、行政はなかなか難しいんですけども、東北には3大祭りとか4大祭りとかいろいろありますね。そういったもののネットワークをつくって、とにかく東北に夏に来てもらおうとかというふうなものを始めようとしているわけです。そのことによって、別に仙台も

お世話したからって仙台が囲い込むような形で1人勝ちしようという発想ではなくて、むしろそちらのほうのネットワークを強化すれば、当然仙台も浮上するという、そういう論理がもう既に見えているわけですね。そういったもので仙台の役割をしっかりと果たしていくことが、東北と仙台との間柄をしっかりと築くことになるというふうに思っていますので、行政もそういう方向に大いに向いて行って、こういった中にしっかりと組み込んでいただきたいなというふうに思います。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

江成敬次郎委員

今、聞いていて思いついたんですけども、そういう意味では仙台が持っている、何度も言いますが資源といいますかね、それは今おっしゃったような、これまで蓄積してきたインフラとか、そういう交通網ということもあるし、西大立目さんが言ったような、どっかでこんなきれいな夕日が見えるんだよというふうなそういう景観資源とか、そういうものをやっぱり何か取り上げて、それを市民全体が共有して、それを生かす都市づくり、これからの仙台の方向性というのはそれを生かしていくんだよというふうな、そういう書き方というのものもあるかな。

そうすると、最初に何々しなければならぬじゃなくて、仙台にはこういういいところがありますよというふうなことを網羅的にわっと並べて、それから、これを生かしてこうやるんだ、こっちを生かしてこうやるんだというふうな、そういう書きぶりもあるかなというふうな、ちょっと思いつきですけども感じたんですけどもね。

柳井雅也委員

もうひとつ、それから我々が議論しておかなくちゃいけないのは、多分、基本構想でもちょっと取り上げたらいいかわからないんですが、さっき言ったのはストックが余ってくるという話をしましたけども、例えば今、鶴ヶ谷団地とかああいったところでは、空き家の再利活用とかそういうのがやっぱり深刻化してきているんですよね。あと、あるいはひとり暮らしの方に対するサポートをどうしていくのかとか、やっぱりそういう点についても今度の基本構想の中に目配りをちゃんと入れておかないと、強いところは伸ばす、そしてあと、そういった逆風とか弱みとなっているところはきちっとサポート体制をしていくというふうな、そういった目配りもやっぱり必要なのかなという感じがしますね。

大滝精一委員長

ありがとうございます。私、読んだ印象で、さっき実は西大立目さんもちょっとそういうことをおっしゃったんですけども、現行のこの基本計画の中の2に都市像というのが4つ出てくるんですね。この4つを個々に読んでみると、とてもいいことが書かれて

いるし、実際その中で、例えばやすらぎと健やかさとか、地球環境時代とか、地球的交流の要とか、未来を創造する学都とか、これもまたキャッチフレーズとしてそれぞれを見てみると決して悪いあれではないと思っているんですけども、ただこれ、市民の人たちがまず読んでいないから、この4つの都市像を共有するという状態に今になっていないんじゃないかということがひとつね。

それから、やっぱりこの4つを構想の中に書いておくことはいいことかもしれないんだけど、何かやっぱりもっと、さっき西大立目さんの、突出したというか、市民の人たちにわかりやすく、なおかつ何か強烈にアピールできる何かがあったほうがいいんじゃないかという意見は私も賛成なんです。そういうのがもう少しそこに強く出てきて、少なくともあえて50年後とは言わないまでも、もう少し近未来であってもいいので、10年とか20年くらいのところでは、仙台としてはこういうまちをつくりたいというか、そういう何かメッセージとかイメージがもうちょっと明確になるようなものがあってほしい、基本構想としていいんじゃないかなと。

恐らくこれ、ちゃんと丁寧に読めばうんうんと思うんですけども、先ほどから皆さんおっしゃっているんで私も同感なんですけど、でもこの4つが出てきて、さらにまたその4つの中に施策がぶら下がっていくという構成自体が、なかなか市民の皆さんにわかりにくいというかな、そういうふうになっちゃっているんじゃないかなという印象はちょっとあるんですね。だからそこはどういうふうな、それこそ都市像とかイメージとかというものをつくっていったらいいかというのは、皆さんとこれからもう少しもっと中身を詰めた上で議論していったほうがいいと思うんですけども、何かそこがあったほうがより市民の側にもわかりやすいし、それからこの構想の中に積極的に入ってきていただいて、先ほどからいっぱい議論があるように、とにかく市民の人たちが1人でもいろんな形に入ってくないと、この構想ってほとんど絵に描いた餅に終わってしまうので、そういう引っ張ってこれる何かを構想の中に幾つか入れておくということが大事なかなと思うんですね。

是非そのところは皆さん方からもいろいろこれから、今日もすごくいいキーワードはたくさんいただいていると思うんだけど、そういうものも含めて何か議論ができるといいんじゃないかなという感じは、ちょっと持っているんですね。

先ほど間庭さんからもありましたし、ほかの委員の皆さんからもありましたけど、その都市像というのはそれだけ独立しているわけじゃないので、それが市民の暮らしとか、それから市民像とか、そういうようなものと結びついてきているということがあるので、なかなか一言だとかワンフレーズであらわすことは難しいかもしれないんですけど、少なくともそれを全部4つに分断しちゃうというのは、なかなかちょっとしんどいかなという、読んでいてそういう印象は受けますね。

柳井雅也委員

政策と横串の政策をきちっとという点で、横串のほうはどちらかというと産業経済のほうの政策にして、縦串のほうは福祉とか文化とか、そういった、お互い布地のように交差するようなそういうイメージでやっていくということと、あと恐らくこれ、僕はち

よっと個人的に思っていることで、これだと言い切れないところもあるんですけども、基本構想の時代というのは地方交付税交付金とか、国からある程度お金をもらえたんで、産業経済の施策というのは、極端だけどネグっていてもよかったと思うんですよ。だけどこれだけ財政赤字が深刻化してくると、やはりこの産業経済政策というのをどっかにきちっと位置づけておかないと、あるいはそういった基盤整理も含めてなんですけどもやっておかないと、本当に大変なことになりますよという危機感を僕は個人的に持っています。

だれが税金を払うのかという問題がありますので、そのときここに書かれているような、僕らクラスターの話、先生もご専門でよくわかると思うんですが、このやり方じゃだめですよ、やっぱり、産業政策として見た場合ね。やっぱりもっと集積施策というのをきちっとやるということと、どこにそういった集積のコアをつくっていくのかということまで踏み込んでいかないとだめですよ。だからそこもやっぱりちょっと、このよくできたと言われている基本構想を乗り越えていくひとつの視点になっていくかなという感じはしております。

大滝精一委員長

そうですね、私個人的には、例えば今度2015年に東西線が通るという話があって、ああいう話っていうのをやっぱりそういう話と結びつけないとだめなんだと思っているんですね。それをすごく小さい形で交通体系の整備とかその周辺のまちづくり、それはもちろん大事なんです、だけどそれだけで終わらせないようなものをしっかりと、これはむしろ基本計画に近いと思うんですけど、要するに何か1本通すということの中に、そういうものを複合的に集積させていくというような、そういうものを織り込んでいかないと、やっぱりこれからのいろんなものってだめなんじゃないかなと。だからそれは産業政策としてもそうですし、もちろんそれ以外の先ほどから出ている、私たちが、今、割と強く言っているのは、だからむしろ1本通すことによって、そこでにぎわいとか、交流とか、観光メトロみたいなをつくっていかうみたいなことをすごく強く主張しているんですけど、何かそういうようなひとつのものを多重活用してって、そこで生かしていくというためのつくり方みたいなものが必要ですよ。

柳井雅也委員

そうですね。あともうひとつ、今ちょっとお話を伺っていて思いついたんですが、産業観光をもっと仙台はやれる可能性があるんで入れていくということで、観光客、今、大体ここだけの単純な統計なんですけど1,100万人ぐらいいて、あと5大イベントというんですか、いろんなイベントで大体700万人、そのうち占めているんですけども、これをもうちょっとうまくお金が落ちるような仕組みづくりも考えていったほうがいいのかな。そのためにはやっぱり文化というのはきちっと使えると思うんです。さっき文化というのは2種類あると言ったんですけども、この総合的な結果としてそういう産業に結びつけていけるような、例の着地型の観光のあれもありますんで、もうちょっとその辺を先取りしてっておいでもいいんじゃないですかね。

大滝精一委員長

今の私の言ったことも含めて、多少これを基本構想にどこまで書き込むことができるかというのと、むしろ基本計画の中に書いたほうがいいことかというのは、ちょっと微妙なところ、ちょっとグレーゾーンなんですけどね、そこはね。

柳井雅也委員

結局、お互いやっぱりリンクしていないといけないので、その議論をちょっと詰めておかないと基本構想も書けないし、基本構想は書いても、結局それで分離したような形だと基本計画の意味がないということになりますから、この議論はもう何回も行ったり来たりしたらいいと思うんですよ。

間庭洋委員

私も柳井先生言われたのと全く同じなんですけど、例えば環境とか低炭素社会の形成とかというと、項目がひとつ起きそうなんですけども、そうじゃなくて、まさに東西線でいえばそういう切り口からそういったものが必然的にセットで、ぱらぱらじゃなくてつながっているわけですよ。それが私が言う言い方でいえば市民像というんですか、都市像と市民というものがひとつになるわけなんですけども、どうここで暮らし続けていきたいのかといったときに、その低炭素社会というふうな切り口だと市民はなかなかじゃないんですけども、さっき言った東西線みたいな交通だとか土地利用の問題とセットであれば、暮らし、まちというものとつながってきて非常に身近になるもので、ああ、そう暮らしていきたいなというものと共感というものが、そういったところから呼ばれるんじゃないかなと思うんですよ。

公共交通でもバスとかに依存するようなものを、もっとせっかく大投資するようなものを生かしてやっていくのは、総合交通体系の大改編みたいなものによって、そういったまちづくりや市民の暮らしが非常に豊かになっていくというふうな形で提示したほうが、非常に共感を呼びやすいし、わかりやすいんじゃないかなという気はするんですね。低炭素社会とか環境問題というのがどんと出てくると、何か自分に関係ないかのような感じに受けとめられるよりは、ちょっと横串の刺し方は非常に難しいんですけども、もっと生活に近いレベルからそういうのを出していったほうがいいのではないかなというふうに、さっきの先生のお話を伺って思いました。

大滝精一委員長

あと、先ほどから東北の中での仙台の位置づけという話があって、それはもちろん私もそうだと思うんですけど、他方で、現行の基本構想の中でも盛んに国際都市とか、特にアジアの中での仙台という話が出てはきているんですけど、これも基本計画に書くべきことなのか、基本構想に書くべきなのか、私は今ちょっと自分として判断材料を持っていないんですけど、つい2週間くらい前も、ちょっとたまたま仕事で上海とかその周辺に行ってみたんですけどね、それで仙台に帰ってくると、本当に大丈夫かなという感

じはものすごくやっぱりするんですね。

やっぱり少なくともアジアワイドの中で仙台がどうやって生きていくかというような話のどこかの部分は、先ほど庭野先生もおっしゃられたように当然そうなんですよ、世界中どこかアジアの中だって、仙台って言ったってどこというふうに聞かれるのがほとんどなんですね。そういう都市の中でこれから生きていくということを考えるときに、世界とは言わないまでも、少なくともアジアワイドの中で仙台がどういう役割を担っていくかみたいな話は、何らかどこかでは触れておかないと、私はやっぱり非常に不安ですね、それは。

やっぱり仙台の立ち位置みたいなものをどこで考えていくのかというようなことを、どこかでやっぱり議論してほしいと思うし、それは従来のような例えばゲートウェイの機能だとかというそういう話だけじゃなくて、本当にやっぱりアジアの中で、これは厳しい側面もやっぱりあって、先ほどの価格の問題とか賃金とかという話もありますしね、それからやっぱり現実にはすごい厳しい経済競争をやっていることも事実であって、そこからやっぱり目をそらすこともできないんだらうという気もするんですね。

ただ、競争競争というだけの話ではないので、そこでいろんなリンクのつくり方とか、これは僕よりか、むしろ柳井先生のほうがご専門かもしれないんですけど、やっぱり仙台としての立ち位置みたいなものというものを、どこかで何らかの形で触れておかないと、これは日本全体が今そういう傾向、やっぱり世界とかアジアの経済の中で相対的に地位は小さくなってきていて、下手をすると本当にのみ込まれていっちゃうんじゃないかというような危機感を私自身も持っているんですね。

それは、いきなりのみ込まれちゃうという話じゃないかもしれないけど、でもそういう少し暗いシナリオみたいなものっていうのがあって、それを完全に払拭することはなかなかすぐ今の時点では難しいかもしれないけど、やっぱり何かそういうものについて仙台としてどう考えていったらいいとか、少なくとも仙台としての何らかの形の主体性とかイニシアチブというのがあっていいという感じは持っているんですね。

それは現行の基本構想の中では余りはっきりとは書かれていないし、例えばいい例かどうかかわからないけど、こんなにたくさん留学生が来ているのに、留学生のパワーというのはほとんど使っていないんですね。それで留学生が帰っていくばかりという形になっていて、もう少しやっぱりそこを、せっかくこれだけの人たちが来ているわけだから、世界各国からね。そういう人たちとの間の、これもやっぱり仙台の私、資産だと思うんですね、すごく大きな。でもほとんど使われないストックになっていて、彼らは学んで帰っていくだけというね、もう少しやっぱりやりようはあるんじゃないかなという、これは大学の中にいた人間としても、そういう何かじくじたる思いがあるんですけど。

柳井雅也委員

アイデンティティーに絡んでくるんですけど、やっぱり自分たちの立ち位置と、今、先生おっしゃられたように、例えば仙台が持っている自然の豊かさとか、あるいは人の豊かさ、そしてあと交流の豊かさとか歴史の豊かさ、さらには産業の豊かさ、そして人間の知恵の豊かさですよ、こういったものに対するきちとした我々自身の認知とい

うのがまだまだ十分ではない。

例えば、僕は中国行ったとき、仙台と言ってもわかってくれないんですよ。だから何を言うかって、魯迅のいたところですよと言うとみんな全員わかります、中国人は。ところが仙台へ帰ってきたら、全然その魯迅を顕彰する場所とか観光ルートもなければ、中国の人が来てもプレートもないということで、せっかくこれから観光爆発が起きたとき、2050年ぐらいになると恐らく中国が観光の1位になって、世界中を観光する人も中国人なんていう、そういう予測あるんですよ。そうするとこの魯迅というのはものすごく大きな宝なんですよ。ちゃんと生かし切っていないんですよ。

だからきちっとそうやって自分たちが生かせるようなことをもう1回再構想、再構成していけば、まだまだ新しいビジネスチャンスだって出てくるだろうし、自分たちの地域に対する理解も、別に自信を持つか持たないかはその人の感じ方ですけども、ただ少なくとも仙台というのはこういったものだということで、多様性と外国と結びついていく接点というのは見えてきますよね。だからこういったことをやらなくちゃいけないと思うんですよ。

結局、仙台の人たちは、仮に今1億なり10億持っているとどこに投資するかというと、外国に投資しないんですよ。全部東京へ持っていっちゃうんですよ。だからそういう意味では、グローバルゼーションとか国際化という点では、まだまだ不十分なところがあって、そこは実は仙台の弱みだなというのを僕は感じているんです。だからそこまで僕ら踏み込んで、この基本構想に持っていけるかどうかはわからないんですけども、少なくともひとつの切り口として国際観光とか、あるいは国際化をもうちょっと具体的なレベルに落とし込んでいって、市民が本当に参加できるところまでのこの施策づくりというんですか、そこまで想定したような基本構想を示しておくことは必要なのかなという感じは思いますよね。

西大立目祥子委員

やっぱり、何か自分たちの身近な資源についての気づきが少ないんじゃないかなというふうに思います。魯迅の住んでいた跡のあの建物は、魯迅が住んでいた場所ではないんですけども、やっぱり何か雰囲気、たたずまいがあって、私は歴史的建造物の保存活動をやっているので何とかしたいなと思っているんですけども、皆さん結構冷たいというか、あんなぼろ家どうするんだというふうに言われて終わりなんですよ。だから何かやっぱり生かす前の段階が、ここにこういう資源がある、留学生が資源であるというような見方がまだまだ少ないような気はします。

柳井雅也委員

実は、留学生が仙台にたしか2,000人ぐらいいるんですよ。彼らの集住している地域、住んでいる地域というのは、実は商店街でいいますと一番町一丁目から片平のあたりから、ずっと学院大のあのあたりに結構いて、その人たち、どういう生活しているかというと、買い物は朝市みたいなところで安く買ったりとか、結構地域でもそういった経済効果を生みだしているんですよ。だから例えば僕なんか、個人的な発想なんですけども、

一番町の一丁目のいわゆるサンモールのあたりでも、もう少し国際化の拠点として、しかもレベルの高い人たちが住んでいますので、やっていけばもっともっと新しい光を、国際化ということをキーワードにして放てると思うんですよ。そのとき魯迅のいたあの故居であるとか、ああいったところは、いわゆる着地型の観光と結びついて、ひとつのメッカづくりというのはできると思うんですよ。

こういう発想というのはあるんですよ、ちょっと仙台の持っている資産に目をぱっと当てるとね。そういうところ、もうちょっと後ろからぼんと押していけるような施策づくりというのは必要だと思いますよね。そうすると1個の施策が.....

西大立目祥子委員

国際化ということになると、結局ローカルなものが評価されないことには生き延びていけないと思うんですよ。そのローカルなものへのまなざしというか、それがやっぱり仙台は、私たち市民含めてすごくないなというか、とても薄いまちだなというのは感じます。

間庭洋委員

それはそういうことであれば、そういう仕組みなり何なりをきちんと用意していくということをしっかりこの中に盛り込んで、10年、20年たてばそういう仙台になるという、目指せるものがあればいいんじゃないかなと思いますね。

大滝精一委員長

それもすごく重要な課題だと思いますよね。ありがとうございました。
どうぞ。

柳井雅也委員

政策づくりのひとつのアイデアとして、これは基本構想には直接かかわってはこないと思うんですけども、例えば中国の人たちはさっき言ったように魯迅の話もありますし、あと露天風呂にすごく魅力を感じていたり、あるいは韓国の方はゴルフをやって、ついでにやっぱり露天風呂とか、あとスキーに来る人たちは、最低2キロ以上のスキーコースというのは、韓国にないんですよ、2キロ以上のスキーコースって。そういったものを提供するとか、我々自身が相手を知っていれば、ちゃんとそういうのを戦略化というのをできるんですよ。それで想定して呼び込んできて、彼らを滞在させるとき、地元の人たちと色々な意味での摩擦を生まなく、きちっと楽しく帰っていただけるようなホスピタリティー教育もやっとできるんですよ。

そういった観光を観光で終わらせない仕組みづくり、なぜこういうことを言うかという、国際交流政策というのは主に観光なんですね、仙台市の今の施策とかを読んでみるとね。だからそのところをもうちょっと、そういう意味では深掘りしていったほうがいいんじゃないかということです。

あともうひとつは、国際化というのはそれだけじゃないということで、プレートをつ

くるだけじゃなくて、食べ物とかも一切含めて、やっぱりさっき言いましたように地域拠点化というのを仙台のどこに置いていくのかということ、ある程度やっておいただろうかいいのかなと思います。そうしないと、まちが乱雑になっていく可能性があって、ものすごい悪い言い方するとアンタッチャブルな世界がどこかのエリアにできちゃうと、日本人、普段入り込めないところが出てきたりとかするんですよね。だからそこをちゃんとコントロールを今からしておかないと、これからたくさん人が来ますんで、まずいことになったときはもう手遅れだということなんで、そこを今のうちから先取りして、ちゃんと施策化していく必要があるんじゃないかと思いますね。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

間庭洋委員

観光というジャンルでとらえたらだめですね、矮小ですね。文化、観光、スポーツだとか自然だとか、丸ごと都市のまちの雑踏も含めてとらえていかないと。今や東北大さんの青葉山でさえ、ビジターの人気のコースがいろいろあるくらいですからね。

大滝精一委員長

どうもありがとうございました。

それじゃ、ちょっとさっきの議論の特に最初のほうで、事務局というか、今、市当局として現行のこの基本構想の中で特に問題に感じていらっしゃる部分とか、あるいは課題がこんなところにあるそうだというようなことについての認識を少し、もしお考えがあれば聞かせてほしいということと、それから庭野先生だったかしら、基本計画の中で、これ基本計画を立てていくとかいうことをこれからやっていこうとするときに、何らかの不確定な要因とか、どういうところがまだよく先が見えないのかという、その先が見えないようなところとして、これから基本構想それから基本計画に移っていこうとするときに、どういう不確定要因のようなものが存在しているのかというようなことについても、もし今の時点でおわかりのことがあれば、ちょっと事務局のほうからもお話しただいて、その後、もし皆さんのほうで質問とか議論があれば続けていくというような形にして、今日はその辺で終わりにしたいと思います。

じゃお願いします。

折田総合計画課長

今の都市像に関しまして、市として総括をした公式見解というのは残念ながらございません。それをつくる必要はあると本日認識いたしましたので、またそれについては検討したいと思います。

それで、今の問いかけに対しまして、2番目の不確定要因といったところも含めまして、まとめてお話をさせていただこうと思いますが、先ほど来、この都市像に関して閉じたものであるといったことが、私も今伺っていて、なぜかなといったところを考えて

おったんですが、ある意味、ここの4つのそれぞれの都市像、独立した形であります。それから、これは読み方によるとと思いますが、その策定の趣旨を読むとこの4つの都市像の関係性というのが明らかになっていると。その論理的な整合性というのを非常に意識したつくりになっていますので、それがあある意味、閉じた印象につながっているのかなというように思いますが、これからの議論の中で、この現行の都市像というものをどうとらえて、どう直していくかというご議論になっていこうかと思いますが、その際の参考として、前回の基本構想において、どういうふうにかこの4つの都市像をとらえていたのかといった点について、前回のご議論の内容を紹介しながらご説明するとともに、その上で、じゃあ今日的にそれぞれどういう解決すべき課題があるのかといった点について、こちら事務局というか、もう私のほとんど私見に近いような形になりますが、それもあわせて申し上げたいと思います。

まず、この4つの都市像のつくりでござりますが、前回の基本構想の策定の議論の際に、ひとつの考え方として都市のアイデンティティー、これまで歴史的にあったものプラス、現代的に見たときに将来起こり得るであろう外的要因にどう対応していくのかといった点で、それぞれの都市像が組み立てられております。そのなぞを解くかぎは右下の花と、その下にある円というのが若干ずれているのでわかりづらいかもかもしれませんが、こちらが皆さんもう気づかれていますかもしれませんが、これが答えでございます。

1番目のやすらぐまちに関しましては、都市のアイデンティティーとして大きな健康都市の伝統、ここでは風土となっておりますが、健康都市宣言以来の仙台のまちの個性といったアイデンティティーと、まさに先ほど来、我々申し上げました少子高齢社会への対応をどうしていくのかといった観点から取りまとめられております。そうした意味で、伝統的にその多様性に対する非常に寛容な姿勢を示してきた仙台市政の特徴というのがあらわれておりますし、この でありますように、長期的に見て少子化対策が非常に重要であると、出生率を回復させるといった取組は非常に重要であるといった認識と、それから生涯にわたる自立とありますが、まさに健康都市というようなことにつながりますが、高齢社会において目指すべき価値といったところがよく出ていていると思います。

あと、その3番目の、市民一人一人の創意が生かされるの部分に関しましては、先ほどもご議論ありましたが、市民、それから市民活動の活発な状況というのは、非常に仙台に資産であるといったことから出てきているものでござりますし、4番目に関しまして、災害というのは本日の中では出てきておりませんが、宮城県沖地震というのは周期的に訪れますので、これは長期的に見て、常に仙台の課題になり得るであろうといったことから入っております。

そうした中で、すみません、ここに関してどうするのかといったことに関しましては、少子高齢化に対する急速な備えもそうなんですが、率直な悩みということで相談に乗っていただければというようなベースでお聞きいただければと思いますが、私が非常に今後の都市像というのを自分自身の中で考えていく上で、この1番目の多様性という言葉と、それからその上で、ある意味、先ほど来、出てきた市民像を示してそこにみんなを導いていくようなイメージ、それが相矛盾するのではないのかなといったところの悩みをずっと抱えておりまして、そこを乗り越えられるお知恵をお借りできればなと考えて

おる次第でございます。

それから、2番目の、地球環境時代を先導する悠久の杜の都とありますが、ここの地球環境時代を先導するという言葉に含まれておりますのが、実はこれ事務局から原案を当初お示ししたんですが、そのとき環境首都という言葉を使っておりました。その意味合いを残すということで、地球環境時代を先導するといった言葉でございます。

あと、悠久という言葉でございますが、ここに関しましては、持続的な発展が今後必要であろうという認識の言葉で悠久という言葉があるんですが、さらにもうひとつございますのが、都市には風格が必要であるといったことから、その風格がどこかで出ないかといったところで、悠久の杜の都というような言葉を使ったそうでございます。ここに関しましても、先ほどのアイデンティティーと外的要因への対応という2つの側面がございますが、アイデンティティーに関しましては申し上げるまでもなく杜の都の風土でございます。そこに前回つけ加わった要素が、地球規模の環境課題への対応をどうしていくのかといったことでございました。

その中で個別の中身を見ていきますと、江成先生、当時起草委員でいらっしゃいましたので、まさに先生のお考えも入っているかと思いますが、まずひとつ大きなとらえ方として、高度な都市機能と豊かな自然環境の調和というのが仙台の大きな魅力であろうといったところが根本にあるのではないかと思いますし、あとはそういった自然環境であるとか景観ですね、そういったものを保全していく、よりよくしていくといったところが、大きな方向性としてあり得るというような示され方がしてあると思います。

それから、3番目の循環型のところですが、当時の時代状況を考えると、まだ低炭素というような言葉がなかなか人口に膾炙しているというような状況ではございませんでしたので、当時としては最先端の言葉であったかとは思いますが、その地球環境レベルの問題をとらえるときに、ここに関してはある程度、現代的な状況にリバイスしていく必要があるのかなと思いますし、あとここから個人的な見解になりますが、地球環境時代を先導するという言葉自体どうするかということについては、よく検討が必要かと思います。正直申し上げて、諸外国における環境に対する投資額、日本国全体として見てもけた違いの投資がなされている中で、果たして地球環境を先導するようなレベルに我々なっていけるのかどうか、そこが目標の置きどころなのかどうかというところは、今の時代状況をシビアに見て考えていく必要があるのではないかと思います。目指すべき姿勢としては非常に大事なことだと思いますが、そういった環境の変化ということに対応していく必要があると思います。

あと、3つ目でございます。地球的交流の要となる新しい中枢都市ですが、ここも当時の策定に携わられた方の思いが入り込んでおりまして、まず先ほどの2つの関係で申し上げますと、アイデンティティーというのは、東北の中枢都市の伝統といったところと外的環境としてグローバル化への対応というのをどうするかといった点で、この言葉を導きだしています。その心はと申しますと、要は東京を基軸に置いて物事を考えれば、仙台は東北の中である意味、中継都市であって、その中で中枢性というのを担保してきて発展をしてきたという考え方に立ったときに、恐らくこれからはグローバル化して、より地政学的な意味合いが相対化されていけば、その東京を基準にした考え方というの

は成り立ち得ないだろうと。そうしたときに自立型の中核都市を目指すべきではないかという意味において、この地球的交流の要となるという言葉が出てきております。その具体策について、いろいろ3章のところでも書かれておりますが、ハード面、ソフト面、いろいろ書かれておるところでございます。

ただ、先ほど大滝先生からもお話があったように、10年前の日本の状況と今の日本の状況を見たときに、日本全体として考えたときに、日本のプレゼンスが非常に落ちているということは、この地球的交流という観点でよく見ておいたほうがいいかなと考えております。ある意味、国全体として見たときに、地球的交流から取り残されるというのが、これから恐らく40年、50年で我々一番避けなければならない状況であり、かつ一番そうなりそうなシナリオではないかなと思っておりますので、まさに仙台が持っているもので世界に通用する個性とは一体何であろうかといったところが、今後のこの地球的交流というところを考えていく上で、非常に重要なポイントになるんじゃないかと思っております。

それから、4番目の未来を創造する世界の学都につきましては、アイデンティティーとしては学都100年の伝統、それから外的環境は先ほど申し上げたとおりグローバル化への対応ということになっております。それである意味、3と4の関係というのは非常に密接に関係しておりまして、読み方もあろうかと思いますが、3の仙台の個性をどうするかと、世界に通用するものをどう持っていくかといったところで、その学都の個性を伸ばしていけばいいんじゃないかといったところで、ある意味、目的、手段の関係にあるところも読み解けるかなと思います。世界の頭脳が集まってきて独創的な学術研究が行われるといったところが基本でありまして、そういった学びの風土の中で多様な学習機会を基礎として、市民、企業が創造的な活動をしていくといった論理展開になっておりますし、ある意味、先ほどのグローバルな中でのローカルな魅力といったところで、一番最後に書いてあります風土と伝統に根ざす文化、芸術、スポーツといったところで、市民の心の豊かさをはぐくんで世界性を持っていくというところが、個性につながると考えております。

ここの学都ということに関しまして非常に悩ましいところは、当時、今もそうですが、国レベルの戦略を考えたときに、科学技術立国といったところと非常にマッチをした戦略になっているかと思いますが、ある意味、世界レベルの研究拠点をいかにしてつくるかといったところに関しましては、まさに国の仕事でございまして、前回の審議会のときも小野田先生から、国の仕事と自治体の仕事の切り分けがなされていないんじゃないかといったご指摘もありましたけれども、そうした点において国の仕事である、まさに世界的な交流拠点づくりといった中で、自治体がどこまでできるのかといったところは非常に悩ましいのかなと考えております。できることは当然あろうかと思いますが。

その中で、今の縦軸で見たときの話ですが、じゃあ横軸を通したときにどういう論理構成になっているかというところでございますが、これはその前の策定の趣旨のところの(1)の をご覧いただければと思いますが、そこで「都市の活力を生みだし、生活の豊かさをつくりだす重要な資源としてこれらを位置づけ、積極的に育てていかなければならない」といったところ、じゃあ、その「これら」とは一体何かと見てみると、

「新しい可能性を創造する知識、情報や感性が強く求められている」といったことが書いてございます。ある意味、そうした認識に立った上でこの4つを並べてみると、成熟社会における人々の暮らしがどうなるかということに関しましては、その1が非常に基礎的な生活の部分について書いてあるということ、それから2番目は地球環境を含めて、我々が新たな環境制約のもと生きていかなければいけないということと、さらには景観であるとか自然であるとか、そういったものを守っていかなきゃいけないということは、その成熟社会における人々の暮らしのあり方というものを、ある程度規定しているのかなと。

その上で、じゃあそれを支えるものが必要であるということを1の策定の趣旨で述べておるわけですが、3番目の地球的交流の要というところと4番目の世界の学都というのが手段になっているということでございます。繰り返しになりますが、その3番で自立型中枢都市になるべきであるという認識を示して、じゃあその手段として、学都という個性を世界で通用するものにしていこうといった構成になっているというふうな読み方もできると思います。

なかなか憲法と同じで、こういうものに関しましては、こういう読み方が正しいという絶対的なものがあるわけではございませんので、あくまで解釈論というところになるうかと思いますが、前回の基本構想はそうしたことで、全体としての論理の一貫性といったところをかなり重視しているとともに、ある程度、総合性というところでさまざまなものに目配りをしているという、かなり複雑な構造になってございますので、そうした中で今まで先生方のご議論を聞いておりますと、新しい方向性というものもある程度見えてきたのかなと、事務局としても心強く思いますが、この今の基本構想をどうこなしていくかといったときにご参考になればと思い、ご説明をさせていただきました。

大滝精一委員長

ありがとうございました。今、どどっと言われて、また私としては頭が混乱しました。解かなくてはいけない問題が山ほどあるということがわかりまして、ちょっと暗い気分になったんですけど、でもちょっともう今日はこれ以上今のような、例えば多様性と市民像を提案するというのがどういうふうに着まうかというのは、こういう問題って結構大事かなというふうに思うんですね。これは単に文章をどうつくるかというだけでなく、そここのところに市民像の中に何を入れ込んでくるかとかというような話とかかわってくるので、本当は少しこれも多少時間をとって議論しないといけないかなという感じもするんですね。

間庭洋委員

要するにつまり、私個人的には、多様性というのは常につきまとう事柄ですので、つかまえてどこが一見なさそうなんですけど、ある意味で市民など、あるいはいろんなところでの合意形成をするときに考える手法として、できればこういう理想的なものを目指したいというのがひとつありながら、でも最低限これだけしたくないねというミニマムのものと、その間が多様性だと思っているんですね。もちろんそこから外れるのも多

様性の中に入るんでしょうけれども、少なくとも何かみんなでやろうよといったときには、それがひとつの多様性の幅の中にある。今回はできればこういったものを目指していきたいねというもののほうを出すのが、今度の基本構想なんじゃないかなというふうに思うので、その中には市民像といっても、できれば仙台市民の多くがいろんな調査やその他のものを見て、そういう方向に意識があるというふうなものをできるだけキャッチアップして、そういう方向にあらわしていくということが、できればこういう都市にしたいねというものに、あるいは市民として暮らしたいねというものに提示できる可能性があるんじゃないかなと、チャレンジできるんじゃないかなというふうには思います。

大滝精一委員長

いや、間庭さんのおっしゃっていることはよくわかりました。むしろこの4つの都市像というのが、仙台のアイデンティティーというのと、それから仙台がこの当時直面していた外的なチャレンジというか、そういうものに対して、多分内側からの方向と外側からのチャレンジというのをうまくドッキングしようというような、そういう意図でこの4つはつくられているというのは、本当はどっかにそういうことを書いておいてもらったほうがずっとわかりやすいんだと思いますけど。そう言われてみると、なるほど、そうなっているんだなというのはよくわかりました、今。

伊藤企画市民局次長

都市像の議論がなされているわけなんですけれども、先ほど折田課長からお話ししました策定の趣旨と都市像の関係、論理的な説明をさせていただいたわけなんですけど、私からは施策の基本方向の部分で、これも私の私見というか内部で議論されている部分でございまして、現在の基本構想はこういう部分がちょっと弱いのではないかと、これは議論されている中身ということで軽く受けとめていただきたいと思いますけれども、今日的においては、ひとつは市民協働と言いながら、その記述が実は弱いのではないかと、というふうに受けとめていまして、それが施策の基本方向で明確にうたうべきなのか、基本構想の推進のところでもうちょっとしっかり、市民主体の都市経営という言葉にはなっておりますけれども、その辺をもうちょっと深く切り込んだ形での記述にすべきなのかという点がひとつございます。

あと、それから当然のことながら、仙台ならではの基本構想であるべきなわけで、その象徴的なものとしては、やはり杜の都というのがあるんですけれども、そういう概念でいうと、施策の基本方向の中で言えるのがその2番目、先ほど江成委員がおっしゃった記述がちょっと足りないねというお話がございました。これも今日においては、間庭委員からもお話がありましたように、もうちょっと低炭素社会に向けた取組というようなことも含めて、縦割りだけではなく横軸を通した見方というのができるのではないかと、というようなこともありまして、この辺もやはり手を加えるべき部分かなというところがございます。

あと、内部で議論していたのは、東西線を軸としたその書きぶりであるとか、あとそ

れから産業政策部分とか、そういったところがやはりもっと強くといいますか、工夫していかななくてはならない部分かなというふうなところがございました。

いずれにしても、本日、委員の皆様のお話を伺っていると、さまざまご提言いただきましたけれども、やはり仙台の場合、地域に存在する価値あるもの、地域資源という言葉が出されていましたが、それをあえて光らせないような価値みたいな取扱いをしてきた、そういう側面があったのかなということで、私も非常に反省しているところでございまして、それを顕在化させていくその作業が強く求められているんだなというふうに本日痛感しました。その辺も含めて、私ども内部でも庁内でいろいろ議論をする機会がございます。そういった本日の先生方の意見も踏まえながら、内部でも大いに議論していきたいというふうに考えております。

大滝精一委員長

ありがとうございました。今、次長さんからお話をいただいたことは、今日の議論の中でかなりたくさん出ていたことで、うまく補完できるかなというふうに思っています。ほとんどの問題、市民協働のことについても皆さんからかなりたくさん出ていましたし、それから環境とか低炭素社会については、先ほど江成先生からもご指摘ありましたとおり、それから東西線は僕が言いましたし、産業政策については柳井先生がおっしゃったし、それからやっぱり仙台のもっといろんな光るものを探していくとか、見つけだしてクローズアップしていこうということについては、委員のかなりの多くの皆さんからいろんな議論があったと思いますので、こちらのほうは今日の議論を受けて、もう少しいろんな形でブラッシュアップしていけるかなというふうに思っています。

最初のほうについては、まだもうちょっといろいろ、事務局のほうで悩ましいと言っているんで、私たちはその悩ましいところをどこまでうまく解決できるかは難しい問題ですけども、ちょっとそこのところはもう1回、会を改めて少しきちんと議論したほうがいい問題がたくさんあると思いますし、それから非常に構成としてもよく緻密につくられている構成になっているんですけども、その構成自体の姿が、必ずしも多分市民の目にはほとんどこれを読むだけではなかなかクリアに出てきていないということも事実だと思うので、そういうことについての組立てとか、それをどう伝えていくのかとか、それをどういうふうにメッセージとして発信するかというような問題も、今後大きな問題だというふうに思いますので、そちらのほうの宿題についてはちょっと次回以降、検討課題ということにしたいと思いますので、改めて議論したいと思います。

それから、もしちょっと簡単な資料を1枚紙とかで結構ですので、先ほどあったようなプレゼンとか問題の提起について、ちょっと用意しておいてください。それで次回以降、それも含めて少し中身を深めていくということにしたいと思います。

どうぞ、お願いします。

間庭洋委員

前回のときからもう入っているんですが、市民協働とかパートナーシップというのは、行政側から言う言葉という受けとめがあるんですね。本当は市民のほうからボトムア

ップで出てくるんだったらすごく理想的なんですけれども、行政側から出てくると、何か行政のオーダーメードを市民が着ろと言われているような思いがなきにしもあらずなので、趣旨はよくわかるんで、一緒にやろうというのはわかるんで、そこを押しつけにならないようなプレゼンテーションをうまく、言葉も含めてできることで一緒にやりましょうよという雰囲気を出していかないと、行政が上から下におろすような協働だとか、突然何かパートナーシップと、おれ言われたぞみたいな思いにならないような展開をうまくやっていかないと、共感性は薄れるんじゃないかなというのがちょっとよく言われることですね。

(3) その他

大滝精一委員長

わかりました。

じゃ、ちょっともう時間数分過ぎてしまっているんですけども、今日はこんなところでよろしいですか。

(はいの声あり)

9 閉会

大滝精一委員長

じゃあ、一応、第1回目の委員会はこの辺で閉じたいと思います。

でも、今日はいろいろいいご意見たくさんいただいたと思いますし、次の具体的な策定のステップにうまく進めるようなご意見をたくさん頂戴したと思いますので、そのあたりのところは事務局のほうも少し受けとめていただいて、もう少し膨らませていくということを少しご相談しながら、次の2回目に入りたいと思っています。どうもありがとうございました。

折田総合計画課長

それでは、事務局から何点かご報告というかご連絡させていただきますが、次回に向けての資料につきましては、冒頭に委員長からご指示がありましたように、この都市像を市として総括をするというのはかなりの、私は私見を述べるのは非常に簡単なんです、市として公式見解を持つというのは非常に作業がもうございますし、あと庁内でもきちんと議論をして皆様にお示しをしたいと思っております。場合によっては両論併記になってしまうかもしれませんが、そうしたお時間をいただきたいと思いますので、皆様に12月末か1月上旬で2回目の日程を内々調整させていただいておりましたが、我々に議論するお時間を少しいただいて、次回1月の下旬で再度日程の調整をさせていただきたいと思いますので、またよろしく願いをいたします。

それから、連絡事項として事務的なものでございますが、お帰りの際、もう6時を回っておりますので、これまでの審議会と同じく、北側の玄関をお通りいただいてお帰りいただければと思います。

事務局からは以上でございます。

大滝精一委員長

それじゃあ、どうもご苦労さまでした。ありがとうございました。